

## 56. 野菜類の総括注意

- (1) 薬剤散布に当っては、防護処置を十分に行い危害防止に努める。特に吸入毒性の強い薬剤は施設内での使用に注意する。
- (2) 果菜類などは生育期によって植物体の大きさも違うので、散布量もそれに応じて調節する。
- (3) 葉裏から侵入したり、寄生している病害虫が多いので、薬剤が葉裏にも十分かかるように散布する。
- (4) 薬剤の選択には、農薬使用基準をよく見て、使用回数、使用時期などを考慮し、組合せなどに注意する。
- (5) 細菌による病害や菌核病、灰色かび病などは、病徴が見られてからでは防除が難しいので、発生予防に重点を置く。
- (6) ハウス内は、過湿になると灰色かび病、葉かび病などが発生しやすいので、換気を良くして過湿にならないようにする。
- (7) ハウス栽培では、害虫(アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類、ハダニ類)の発生が多いので、初期から防除を徹底する。
- (8) ハウス栽培では、日中の高温時に薬剤散布をすると葉害が出やすいので、朝夕の涼しい時に散布する。
- (9) ハウス内に残った作物残さは病害虫の伝染源になるので、適正な残さ処理を行い清潔に努める。
- (10) 殺ダニ剤、合成ピレスロイド剤などは、多回数使用すると薬剤抵抗性がつきやすいので、同一薬剤及び同一系統の薬剤を連用しない。
- (11) フロアブル剤は保存中に分離することがあるので、使用前に容器をよく振ってから使用する。
- (12) 浸透性を高める効果のある展着剤(ニーズ、アブローチBI、ミックスパワー等)は、加用すると葉害の発生を助長することがある。
- (13) ベンゾイミダゾール系(ベンレート、トップジンM)、ジカルボキシイミド系(ロブラール、スミレックス)剤及びDMI剤(トリフミン、ルビゲン、サブロール、スコア等)、SDHI剤(カンタス、アフェット等)などの薬剤は、連用すると薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一薬剤及び同一系統の薬剤を連用しない。また、効果の低い場合は、その剤及び同一系統剤の使用を中止する。
- (14) QoI剤(アミスター、ストロビー、ファンタジスタ、スクレア等)に関する注意事項
  - ・連用すると特に耐性菌を生じやすいので、他剤とのローテーション使用を徹底する。
  - ・本系統薬剤の使用は可能な限り一作1回までに留める。やむ得ず使用する場合は、異なる系統の薬剤を2回以上使用した後とする。
  - ・うどんこ病に対しては効果の低い事例が報告されているので、特に上記の注意事項を遵守する。
- (15) アミスターは、りんごの一部品種(シナノレッド、あかね、旭、きざし、ガラ等)に葉害を起こすので、かからないようにする。また、本剤を使用した散布器具やタンクは洗浄して用いても葉害を生じる恐れがあるので、これらを用いて上記りんご品種へ薬剤散布しない。
- (16) バイオキーパーに関する注意事項(ベジキーパー及びマスタピースも準じる)
  - ・生菌を使用しているので、長期の保存は冷蔵庫等で行い、開封後は全て使い切る。常温で保存する場合は、6ヶ月以内に使用する。
  - ・本剤と銅剤、抗生物質剤、オキシリニック酸剤との混用及び近接散布等は行わない。これらの剤を散布する場合は、7日以上の間隔を空けること。
  - ・各種乳剤は有機溶媒を含み、バイオキーパーと混用すると有効成分の細菌に影響を生じるので、混用しない。
  - ・本剤の散布時が高温乾燥でかつ乾燥状態が数日続いた場合、細菌の定着が十分でなく、防除効果が劣ることが考えられる。このような場合は、再度散布すると効果が安定する。
  - ・本剤の使用に当って展着剤の加用は必要ないが、加用する場合は殺細菌性の展着剤(ニーズ等)を避ける。
- (17) ボトピカ水和剤に関する注意事項
  - ・本剤はバチルス菌の芽胞を製剤化したものであり、生菌であるので散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。また、開封後は密封し、できるだけ早く使い切る。
  - ・本剤の防除の作用性は、バチルス菌による病原菌との生育場所の競合である。このため、発病前からの予防散布及び定期的な散布が重要である。
  - ・本剤とキャプタン、マンゼブ、プロピネブ、TPN及びこれら成分を含む混合剤と同時使用しない。
  - ・低温条件では効果が出にくいので、10℃以上が確保される施設内で使用する。
- (18) ボトキラー水和剤のダクト内投入処理をする場合の注意事項
  - ・本剤はバチルス菌を有効成分とする生物農薬であり、このバチルス菌が植物体上に定着し病原菌の住かと栄養を競合することにより防除効果を発揮する。そのため、本剤は発病前からの処理により植物体への定着を促す必要がある。
  - ・剤の有効成分(バチルス菌)はキノコ栽培において、ストップ症状(キノコ菌糸の蔓延阻害)を引きこす恐れがあるため、施設外へ流出しないように注意する。
  - ・有効成分に影響を与える恐れがあるため、キャプタン、マンゼブ、プロピネブ、TPN、ストレプトマイシン剤とは併用しない。
  - ・本処理を行うに当り、健全苗の定植による本圃への病原菌持ち込み阻止や、適切な株管理など耕種的防除

を励行し、イチゴうどんこ病が発生しない環境を整えるのが前提である。また、発病後は上記以外の化学殺菌剤を併用し防除を行う。

- ・低温条件では効果が出にくいので、10℃以上が確保される施設内で使用する。
  - ・吸湿性の薬剤であり、過湿条件では固化する。使用分量のみを用意し、薬剤は開封部分を密封しておく。
  - ・本剤のダクト内投入処理にあたっては以下の点に留意する。
    - ①暖房機が故障することがあるので、暖房機の吸気口からは絶対に投入しない。
    - ②散布中はハウス内に入らない。散布後は十分な換気を行ってからハウス内に立ち入る。
    - ③ハウス内に本剤が均一に飛散することが重要であり、暖房機の稼働によりハウス内が均一な温度になる条件を使用前提とする。飛散状況を確認するため、散布後は以下の点を確認する。
    - ④不備のあった場合にはダクトや投入口の設置状況を改善し、良好に飛散するようにする。
    - ⑤確認事項：散布後は投入口付近に薬剤が残っていないか、ダクト内に薬剤がたまっていないか、結露などによりダクト内で薬剤が吸湿し固化していないか、内張の被覆ビニールの外側にダクトが移動していないか。
- (19) エコショット及びアグロケア水和剤に関する注意事項
- ・有効成分が生菌であるため、開封後はなるべく早く使い切る。
  - ・低温条件では効果が出にくいので、10℃以上の気温が確保される条件で使用する。
  - ・予防効果主体の薬剤であるため、発病前からの定期的な使用を行う。
  - ・発病のみられた場合には、化学合成農薬を用いて防除を行う。
  - ・多くの殺虫・殺菌剤と同時使用が可能であるが、アリエッティC水和剤など混用できない薬剤もある。
  - ・本剤の有効成分はキノコ栽培において、ストップ症状を引き起こす恐れがある。周辺にキノコ栽培がある場合は、飛散防止等に細心の注意を払う。